



和漢文探

詩類
辭類

歌類

二

中村俊定文庫

文庫 18

195

2



和漢文操卷之二

○詩類 附序

△大和真名詩序 並發

東華坊

頃日撰分獅子庵之文庫^{ラトテ} 迎點檢燈^{スレハ} 卷
詩^ヲ 取^ラ 了^リ 則^チ 從^ヒ 歌行詞曲之題類^ヲ 雜^シ 五言
七言之律詩^ヲ 而大槩有二百余首^モ 取^リ 手
去^ル 者^ハ 從^ヒ 延寶之中^ニ 比^シ 及^ビ 貞享之末^ニ 迄^シ 十
餘年^ノ 之^ニ 草稿^{ナリ} 也^{ナリ} 其詩也^ハ 為^シ 學^ニ 子^ニ 太^ニ 白^ノ 之



以情字杜子美之凡次亦止乎字之而思
之則心知而不口慙者從音訓之遠
決而知難學物了矣於茲從元祿之始
思立大和之詩而製假名與真名之二
樣了則假名之詩者從五七之句法殆
為似和歌了共語路之拍子者謂漢土
之詩矣于然謂真名之詩者憚音韻些
調平仄些蜂腰鶴膝之掙這一麼不肯
漢家之詩法交以音訓之通路視之時
有漢字也共聽之時有和文也乎左在

共有故翁之所謂事大和者從中音之
凡俗有狂歌有狂詩而以如夫者千金
是者疝氣秀句與口相之雜話為各附
詩共歌共乎左有者一座之酒與而謂
猿樂人之輕口矣文章者例有娑情之
二而娑情有先後事者從本詩歌之骨
法也則言語之面通味者可口傳了共
娑情之枯回者不心知與所我今傳居
其間之糸助而同以凡雅不認於諸越
別以比與不狂于大和實麼思被嗔我

朝之詩而特^レ有^レ雅俗通用之一格事^上歷
 乍^レ充^レ有^レ和^レ漢語之音韻而^レ為^レ用^下俚語之
 續^レ了^レ則^レ似^レ通^レ首^レ之狂詩而不^レ道^レ戲法之
 罪^レ止^レ所^レ詮^レ者^レ為^レ為^レ蹈^レ詩之六義此^レ尋^レ韻瑞
 活法之古語而用^レ二字三字之韻礎居
 據^レ說文韻會之正義而調^レ五言七言之
 和訓^レ要者何^レ迎^レ可^レ成^レ教^レ習者之狂詩成^レ
 表^レ貝師之狂歌矣耶多見^レ羅山之七字
 城^レ了^レ則^レ其^レ言^レ取^レ漢語以^レ詠^レ我朝之事^レ而
 此^レ可^レ為^レ骨^レ彼^レ可^レ為^レ飾^レ與^レ者一言萬當之

凡例而謂^レ為^レ盡^レ大和真名之要^レ矣夫學
 彼^レ人^レ者^レ可^レ恐^レ此^レ不^レ恐^レ此^レ人^レ者^レ不^レ學^レ彼^レ了
 增^レ而^レ謂^レ大音之^レ以^レ俗^レ則^レ此^レ物^レ以^レ人^レ亦^レ麼
 互^レ先^レ教^レ誡^レ之情^レ而^レ為^レ後^レ文章^レ之^レ姿^レ了^レ則
 花鳥之優游^レ亦^レ者^レ為^レ厥^レ樣^レ也^レ共^レ盡^レ實^レ情
 之餘^レ迎^レ加^レ陪^レ助^レ語^レ副^レ止^レ乎^レ古^レ之^レ情^レ者^レ隨
 天理^レ居^レ今^レ之^レ情^レ者^レ變^レ人^レ理^レ歷^レ爾^レ有^レ則^レ溫
 情^レ之^レ故^レ而^レ知^レ姿^レ之^レ新^レ了^レ哉^レ漸^レ從^レ李^レ唐^レ之
 詩人^レ增^レ而^レ至^レ趙^レ宋^レ之^レ作者^レ則^レ詩^レ亦^レ者^レ除
 助^レ韻^レ之^レ字^レ而^レ互^レ七^レ之^レ間^レ不^レ費^レ言^レ葉^レ見^レ習

其身其終之名人而巧一字一言之妙
 欲含無量之情其似童部之屈言傳而
 有甫人麼推量之沙汰也乎實夫我朝
 者手不波固也則傲詩經之麟之皇矣
 而可用乎哉乎也之詞阜矣歌行之類
 者勿論之事也其內音韻與平仄之事
 者不知所用之道理共暫不肯古法耳
 也則假令遇兩韻之字時者可勿論用
 兩韻矣乎從本見為得詩聖之名杜律
 之五言七言了則平仄之不合麼有

尔者向不知者而論不知事則夜麼月
 麼摸象之弗費也乎熟思以雅之變則詩
 者成騷騷者成辭而今者成詩歌與連
 佛了則和漢有面々之物數奇而諫人
 宛愿我宛從詞遣之虛實例知淋敷去
 與面通去則詩者唯遊志之行處而不
 如知言語之無用乎左者云些此詩之
 易學而黃白之給麼稍有多則世更成
 狂詩之思而不田于烟學文之人者成
 巴人薤露之和共向以而鼓之則不堪

于白雪之詠，其誠恐而可學，誠學而可思者，唯是此詩之風姿也。則凡情者，今之不及，言于時元祿乙亥冬，神無月十二月，試製真名之詩，而其真故公羽之畫像者，爾也。

其琴

車卷坊

此翁昔在武陵城，
蘭省得時櫻繫馬，
歌羞西上人臨渡。

野分芭蕉以雨鳴，
序山捨世竹棲鶯，
詩做杜工部字情。

和漢文章誰可敵，假名不必隔真名。

○評云此詩，婉靡之法，以テ和漢兩用ノ作，凡云シ抄スルニ一二ノ起句ハ祖翁嘗テ武江ニ通テハ芭蕉野分カシテ盟ニ雨ヲ聞夜哉ト其世ニ郷音スル發句ニテ芭蕉菴ノ名モ此特ヨリトヤ然ハ前對ハ一世ノ榮辱ナカラ向氏文集ノ詩勢ヲ假リ後對ハ一生ノ風雅ニテ常ニ西行ノ山家集ト杜律ノ五言トヲ持アキ結ハ信古ノ愛情ヲ顯セルナリ。此故ニ七八ノ結語ハ假名ト真名トノ通用ヲ稱シテ遠ク祖翁ノ遺命ヲ傳ヘ近ク我師ノ本懷ヲ遂ナリ。

琴雪中柳

此繪使人思古詩，梅花未識竹先知。

知^ト與^ト不^ト識^ラ孰^カ為^ル愈^サ 柳^ハ乍^ラ氷^ハ凝^ハ被^ル雪^ニ推^カ

○評云此詩ハ墨詔ノ格ニシテ法ハ換骨ノ絶妙ト稱セン去ルハ
崑山ノ夜雪ノ句ヲ假リテ覺字ヲ識字ニ換タル例ノ
臆句ヲ思ヒ時ニ詔路ノ拍子ヲ調シ厚ナリ増テ孰愈
トハ論語ニ知字ノ裁入ナリ然レハ梅行ノ知字ヨリ
柳ハ知字カラ雪ニ推レ居ルハ利鈍ノ用ヲ知トシテ詩ハ
誠ニ此等ノ詔諫ヨリ孔子モ常ニ勸玉リ此等ノ濃ノ
野航亭ニ在リテ祖翁ノ作繪ト同ク十襲ス柳雪堂
ノ標号モ此時ノ稱ナリトフ

詠^ス懸^ル松^ニ舞^ラ

何^レ不^レ朝^顔知^ラ我^ノ秋^ヲ 松^ニ憑^ル千^ノ歲^ノ幾^ノ程^ノ秋^ヲ

凋^ル時^ハ可^ク恥^ツ祗^ニ王^ノ意^ニ 莫^ク恨^ム不^レ知^ル白^ノ雨^ノ路^ノ秋^ヲ

○評云此詩ハ之韻一協ニシテ詩意ハ註スルニ及ハス祗王祗王
カ四路ハ送洪ノ祗王寺ニ在リ發心ノ歌ニカ明出ルモ
枯^レハモ同^ク野^ノ邊^ノ草^ノ何^レ秋^ニ是^レ連^ハテ果^キト誦^ス
テ佛前ヲモ恨ストフ然レハ此詩ノ之韻ハ其歌ノ意
摘テ秋ノ一字ヲ運ルナリ首句ト落句ト不知ノ二字ハ
連能ニ云ル同字異訓ニ此等ヲ和詩ノ凡例ト知ルレシ
不知モ莫^ク恨^ムモ万^ノ葉^ノ熟^ノ語^{ナリ}

戲^ニ傲^ル道^ノ心^ニ

四十八枚願 終^ニ成^ル絳^ノ子^ノ坊^ト

與凡憎若繁
肩些有伊達
宛尊初雪且

每物遣淺黃
心曾與化粧
立不取梅香

○評云此詩ハ全ク大和ニシテ四十八願ノ仏語ヲ假テ縁ノ縁語ニ結スルハ戲ノ一字ノ詼諧ト知レシ按スルニ此法師ハ歌舞ノ遊興ニ千金ヲ尽シテ若道心ト成ルニヤ若繁ノ二字ハ其所縁ト同ク此故ニ七八ノ結句ハ初雪ノ句次ナリ梅香ハ凡情ヲ含スル一篇ノ凡雅ハ此二句ニ在リテ立而不取者其由也興ト云ル論語ノ詞ヲ裁入スル談者ノ虚實ハ更ニシテ又ニ摘採ノ絶妙ト稱スレ増テ梅香ハ絳子ノ鼻ニ敵シテ一篇ノ起結ト知キナリ誠ニ真名ノ詩鑑ト云ヒ

頃日從二竹丈人祝ニ七夕之節供
而被贈一束之謝每歲之
思而聊寄四情而已

一束荷思何若輕
思君四百八十情
誰知小葉戰於秋
音信不諱久月名

○評云此詩ハ大和凡躰ナカラ論セハ連歌ノ優情ト云ハシ十帖ノ絳ヲ枚々ニ分ケテ四百八十ノ恩情ヲ荷フトハ誠ニ微意ヲ尽セリト云ヒ然レニ十字ヲ時深坊ニシテハ春風ニ而九十橋トモ南朝四百八十寺トモ其類ヲ長安ノ語音トカ註セト我朝ノ人ハ語音ニ通セス何ノ道理トハ知子氏古法ニ任スル例ノ故實ナリ去ハレ四ノ結文ハ全ク和歌ノ詞ヲ摘テ

定家卿神無月ヨリ純ニ文月ノ名ヲ寄セタレテ秋ノ音信モ
和歌ノ句類ニ此等ニ和漢ノ通用ヲ稱スレ但レ山南ハ少
類ニテ表濃ニ封緘ノ名産ナリニ竹ハ戸田家ノ武士ニ濃ノ
名崎ニ嘉道セリ先師ニ膠漆ノ旧友トフモ梅スレシ山南
ノ詩ト俄道心トノ詩躰ハ大和ニ連俳ノ二様ヲ尽シテ此等
ヲ真名ノ詩鑑トハ云ハシ然レ祖公羽ノ恐レ玉ル狂詩狂歌
ノ難ヲ道シテ多ニ雅俗ノ當用ヲ知テナリ

右此五首者有之祿之新製而
燈花詩叢之附録也左有厚
再撰文擇而為大和真名之
濫觴後人宜敷可勘察也

真名詩類 雜題

和栗山氏詩

林道春

有雄^{ハシメ}又^{ハシメ}有雌^メ也 此氣浩然^{トシモ}在^レ口^レ言^ヒ
雖^下古^ク神代^ノ春來^ハ者 東風吹寄^ス自^レ天原

○評云此詩ハ四羅山文集ニ在テ殊ニ我神ノ始ヲ云レハ多ニ
真名ノ詩ノ首ヲ仰トセリ然レ詩ト歌トハ語路ノ拍子
ニ抑^テ遠^クアリテ俚語ヲ用^ヒト漢詩ト成リ漢語ヲ用^ヒト
俚詩ト成レハ此等ニ後君ノ評ヲ待テ詮^スル所ハ狂詩ト
俳詩トニ歩千里ノ好悪ヲ知^レトナリ梅スレニ言語拍子
ハ本ヨリ俳諧ノ自用ニシテ和歌ニ五七ノ調云テ知^ラカハ俳諧

二四六ノ文法ヲ立ルハ例ニ一類ノ意地下知レ然レハ詩ト云フ
又ト云フ五七ト四六トノ拍ヲ知レ和歌ノ優情モ俳諧ノ平話
モ雅俗ハ言クニ知レキナリ

秋風像

蓮二房

世傳、此老翁
今見何難面

越路恨秋風
松残夕日紅

○評云此繪ハ松ノ木陰ニ老僧ノ杖ヲ推ルテ雲ニ文ハ残照
ヲ詠スル躰ナリ去ルハ芭蕉先公羽越路ノ行脚ニ都々ト
月ハ難面モ秋風ト詠セシ旅行ノ愁情ヲ引替テ今見
ルハ景色ノ面白ト轉シテ卷言ニモ作者ノ活法ナリ此等ニ
意地ヲ知テ其繪ハ越中ノ倚屋亭ニ在テ知ニ身家珍ト
セリ

戲影法師

水陳人

木端影法師
終云獲既整箇

盃取夜寒
無當非玉卮

○評云此詩ハ例ノ詠詠ナカラ徒然州ノ意ヲ摘テ今法師ノ
無風雅ヲ詠諫セシ身ヲ木端ニ捨果テ月花ニ會テ霜露
セハ玉卮モ當ナキ心地ヲト全々備ニ月ヲ含メ隱見ノ法
ヲ見キナリ結句ハ木端ノ戲ヲ玉卮無當難當非用
ト云フ文選ノ詞ヲ採ル非字ノ數畧ヲ互見スレ去レト
當字ニ平仄ノ論ハ例ノ兩韻ニ任スキナリ作者ハ尾陽ノ
素水ニシテ水陳人ハ標号ナリトソ

謝初茄子作者ハ慧心庵記 土方堅立

含露^カ露^ル歇^セ水^ス毫^ホ鮮^{セン}
我^ガ鄉^{カト}何^ニ為^ル酒^キ
更^ニ思^フ繁^カ所^カ綠^リ
日^ニ瘦^マ不^ス掉^ル始^メ

琴^ス鳥^ス羽^ス繪^ス之^ス蒲^ス首^ス吸^ス 渡^ル白^ク狂^ク

琴^{コソツテ}吸^ク蒲^フ首^コ何^ニ國^ニ儻^カ
足^ハ如^ク電^カ馬^ノ只^シ如^ク蛙^ノ

盃^ム時^ニ有^ル好^ク威^ト童^ノ部^ヲ 夕^ニ遇^フ裁^ノ園^ニ可^ク振^ル猿^ノ

此圖ハ洛ノ全暇筆ナリト詩ハ詠諧ニシテ註ニ及ス其繪ハ
濃ノ六之亭ニ在リ但裁園ニ首ヲ移テ高師郎ハ自稱

△假名用真名韻序並詩 康安道

我^レ聞^ク諸^ノ越^ノ之^ノ人^ノ者^ハ作^レ詩^ヲ了^レ共^ニ不^レ能^ク他^ノ國^ニ
之^ノ歌^ヲ大^ニ和^シ之^ノ人^ノ者^ハ誦^ク歌^ヲ了^レ共^ニ不^レ能^ク彼^ノ邦^ニ
之^ノ詩^ヲ假^シ令^ク詞^者有^ル音^ノ訓^之違^ヒ麼^ノ情^者何^ニ
連^テ隔^テ和^シ漢^ヲ矣^ハ自^ラ則^シ高^ク靡^ク人^ノ麼^ノ馴^ク大^ニ和^シ歌^ヲ
而^{シテ}誦^ク我^ノ君^ノ國^ノ之^ノ事^ヲ所^レ意^シ數^ト琉^ノ球^ノ人^ノ麼^ノ遊^ル
筑^ク繁^ク而^{シテ}詠^ク紅^ク葉^ノ赤^ク洵^ク園^ノ之^ノ夕^ニ自^ラ泉^ノ矣^ハ皆^ク
只^シ為^ル風^ノ雅^ノ之^ノ通^ク情^者厚^ク哉^ハ初^メ社^ノ所^レ自^ラ彼^ノ邦^ニ
之^ノ詩^ヲ經^テ者^ハ通^ク我^ノ朝^ノ之^ノ万^ノ葉^ノ集^ル居^ル而^{シテ}詩^ヲ之^ノ

以有為何古今集與哉詩者本通和漢
 之志了則也今者六歲之先也季儂東
 有桃花老仙而奈何捨我國之易讀假
 名而學他邦之難知真名耶連新製平
 假名之詩而令盡漢家之詩法者誠謂
 本朝之文鑑者矣於茲不恥我拙頃日
 送蓮老師之歸美濃連為假名之詩用
 真名之韻止乎老師稱其詩曰先師昔
 有奈猶文而斯所交和漢之韻今也
 以此詩之格可謂万葉之韻與所誠哉

如放之文之箭而獲八面之鷹率夫不
 謂激俸厚耶仍以霜云

松よのゆきを年とあらしむ霜
 おあふ秋の月よとくか
 此れあふまふ此ふあふ友
 享保甲辰の歳且一例の詩とあつち
 万葉の韻と一冊の撰和
 國君と祝下
 藤守道
 是
 足
 萩

おろしく万葉賦とて
くさくさ反教の字とてろむ

毛物子

天はくみしと霧やふか

我はありと此れをきふ

字のてや此花もはく

現の海ははく

○評云右此之首八万葉韻ノ濫觴ニシテ或ハ音ヲ用イ

或ハ訓ヲ用ユ去ル其書ニ跋渉シテ多ハ古例據ルヤ

字フ人ハ例ノ狂簡ヲ恐テナリ作者ハ賀ノ金城ニ住シテ

庶熊ヲ姓トシ安道ヲ名トス本ヨリ詩騷ノ逸人ナリ

トウモ物子ハ橋姓ニシテ俳名ヲ侶鶴ト云フ金城ニ教奇

ノ名ヲ稱シテ編行官家ノ人々モなトシ字ヒスト云フ皆

嘗テ先師ト虚実ヲ論シテ書通ノ遊敵ナリトク

享保甲辰のふあんかの万葉の詩といふも猶

ましく二字約の熟語あつて柳子庵上例の註氏

とちやては月雨のおは淋さたふく忠題と
あくらげばちく二字約の熟と観と

田家憲

蓮二二房

はくしもの名はくしはゆき

花はかみんのもりや

後香あつぬ沼のかげ

後めはれはたさ

○評云此体モ万葉ノ韻ニ似タト多ハ訓ニシテ音ハ稀

ナラン然レハ格ノ要ス所ハ和漢ニ字ノ熟語ヲ尋テ

私ノ韻礎ヲ作カラス在ト不在トハ此塚ナリ梅スニ露濃

ハ雅俗通用ノ平語ニテコイヒケレ例ノ通語ナリ俗中

ノ二字ハ日本紀ニ出テ歌副ハ万葉ニ在リ熟通ハ真名

大泉

三

伊勢物語ニカハシラカレハ例^レ各語ナリ然レハ浅香花
カウニト詠シ影^レ此見山井乃ト誦ル總テ古歌ノ
裁入ニテ此等ヲ二字韻ノ鏡ニ見ルレシ去ト^レ閑思凡
糸^レ凡^レ俗習ニ用ク来レル故宮ノ詞ハ論ニ及ハズ但ハ
自己ノ作ト云フ凡^レ或ハ古文ノ例ニ效ク^レ或ハ文字多^レ據
或ハ字訓ノ細音ヲ假ラハ却テ奇絶ノ作モ有^レキナリ
其等ノ設ハ大和詞ニ見ルレシ

こころみ月のけしきもよしの蓮舟より負名此
二字初とあれどその思の一幸とありけり
ありぬをまゝとくおろしはまゝとく思ひを
とく

怨^レ亡^レ久^レ意

康守道

こころみ月のけしきもよしの蓮舟より負名此
何のなきむせもたれ^レ虚言
いづれ^レおとちきり^レたれ^レ虚言

○評云此詩ハ恨意ナカラ逢^レ不逢^レ意トヤムン誠^レ怨情
ノ的^レ由^レナル此等ヲ俳諧ノ微中ト賛^レシテ和歌モ尽^レル
所ト称スレ^レ按スレ^レ浅猿ハ例ノ假訓ニ意ヲ運ヒテ
此類ヲ大和ノ古文ト云イ^レ虚言ハ常語ヲ論^レ及^レス然レ
ニ葉^レ葉ト^レ係^レ福トハ全ク作者ノ働^レニシテ葉^レ葉ト^レ根^レ葉
ハ例ノ俗習ナリ况ヤ^レ淺猿ノ古語ヲ假^レテ物ヲ^レ添^レノ美
ニ據^レル字訓ノ細音モ文字多^レ美モ此等ヲ自作ノ絶妙ト称スレ
右今より又首と文標と新制表の二口也前の二首
と下葉、韻といひ後の二首と二字韻といふ畢竟ハ
求韻の要ありて作し不作しを向ふべき也

老圃詞

岸昨暮

我とかいーと人のあつり可南
勝るくはさひい来品きりか

露とあつれいさのあけ旭曠
おとせぬ世いふ留り而云りよ

祝竹餅

相応角

あま事と云ふあつり廉
名も管のわらわさ刺む

蓬と子の餅はれ鹽
けふせよもとふた兼あつね

○評云此詩モ万葉集ナカラ称ス所ハ之四ノ面通味ナラシクニ
厚餅ノ撮タルヲ管ノ振ニ喩ヘ芋頭ノ踏タルヲ鵝ノ形喩

去ハ俳諧般客ナリ況ヤ花ヨリ團子トハ民間ノ俚語ナリ
ナリ然レオニ韻ノ隔字ニ假名遣ノ論アルニ庵ト云
類ト云テ推ル字ハ總テホノ字ヲ用タト故又ニ道理ナキ
故ニ哉朝ノ字書ヲ見シホ氏シラモ假名附アリ物ニ假名
遣ト云フ莫ク定家卿ノ後ノ沙汰ナリトヤ道理ノ知レヌ
多ク然レハ兩韻ノ序詠ノ如ク其字ニ其理ノ明ナラヌ
ハ時宜ニ隨テ用キニヤ例勅察スニ作者ハニ言ハレテ

喜七又晴

池二川

今宵ハ昔レハ風もあつねえ
世にわらわらひいもあつねえ
年のおあやめあつねえ

六抄卷三

七

まづ心と舌とや知も ちよ詞のほろもあるか
 我もねらふの衣かきまき ねまごんねぬけぬれ
 ○評云此詩毛律法ノ新制表シテ例ノ大和ノ一格トヤ云シ
 一三六葛上櫃トヲ以テ漢三前對ノ法トカラ中間ノ對ニハ
 又ラナラ對セス葦草和漢ノ四字ヲ以テ此等ヲ意對
 ノ絶妙ト稱スヘシ但ヤ假名石ニ直名ラ附ルハ催馬樂
 ノ古制表ナリ作者ハ越中ノ富山ニ住ス池田氏ノ家士ニシ
 先師ト北蘭ノ友ナリトフ

假名詩類 雜題

粟好法師贊

表花仙

現はるる静ちるる夜と かねりまははれもるる
 あ部の花をよ送ありし 本曾汝の月を袂にちるる
 雪の一言に伸直をうり ちのよのうを感思いあふ
 本をよせむるるを切まき 是れく叶の種ををむる
 柳後園 居易霖 專文人洛ノ吾仲之 詩歌時ノ狂名 馬ヤ人
 柳のるる花およそこれと 多んらんはあるるあから
 むのらくりもむのらるる けあきのあををゆきまき

急文 牡丹

作者ハ枚王頌ニ 名録アリ

伊東怒

牡丹と蝶此れとあり 猶も木に人をも集むるは
我をを心のひかりに くらり花葉のまはれ

詠^ス梅^ヲ

高九把

梅と えりけ みんあはれえこ
吾れ 後そそ 喜まきあう
園と あやあり きれうらうむ
雲に 香とある あらほふわをれ

此詩ハ唐ノ李太白カシ五七言ニ效ナカラ和ト漢トニ
音訓ノ差別ヨリ句ノ配リ違同ヲ見ヘシ作者ハ
高田中ニシテ尾城下ノ逸人ナリ

擬^ラ古^ニ

作者ハ文基序ニ
姓名アリ

張昇角

松と竹との大跡をいげ 松言ふあはれを即月を
礼と神代の歌をいぢりて 録のまきちりかきあは

筆

此詩ハ方葉假名ヲ假ワテ
都金下時雨トニ字ニ對テ
大和ニ對類ノ格ト云ヒ

岸野實

字とらあめのみちあゆみ 文字と傳ふる世にまはれ
口とつれあはれをいぢり 足あはれをいぢり
あやうきあはれをいぢり 竹あはれをいぢり
そとや端の情をいぢり いくし遊女の情をいぢり

嶺ノ傾城作者ハ文鑑ニ姓ハアリテ 黃山下ノ隱士ナリ 渡右範

男とくまののちよきあひて ちよのちよのまじりて
まじりてあひのちよあひて 後のまじりてあひて

對花感ス 禪作者ハ越ノ安住寺ヲ 僧音吹辭ニテ其聲ニ品道

ス閑居ヲ抑明ニ養アリ

喜も夏もやむし時あり 山も移るもあはれ
美しき心もあはれなり ようや美しき心もあはれ

民詞 作者ハ文鑑ニ各録アリ 獅子ノ親族ナリ 冬東羽

此も花もあはれさげもや さげもあはれさげもや
あはれもあはれさげもや 我もあはれさげもや

眞 擬古詩 渡白狂

宿のりき各此梅もあはれや 竹とてあはれさげもや
梅もあはれさげもや 竹もあはれさげもや

○評云此詩ハ一字ノ韻ノ格ナカラ梅ト竹ト四句ニ配リタル
古詩、蘇ト云キナリ本ヨリ一字ノ韻ハ漢ノ歌ニ多ク下
和訓ニハ語路ノ分ケ難キヲ疑辭ト云ク嘆辭ト云ク口合
ソシテ以テ之段ノヤノ字ヲ用ヒタル例ニ天和ノ新制ト
云ハシカレハニ備ノ註スル所ハ眞實宿梅ノ古語ヲ假テ眞

一字ヲ含スル格ニ隱見ノ絶妙ト稱スキナリ

師走朝寢

仙里紅

力を控棒の歸しはるゝ 喜ぶら顔北極へ鳴りし
園より木の枝と越れぬ 世と暮る川に漕ぎつゝ

○後云け詩ハ黄鵠園ノ歳暮ニテ賦ニ魚鮓トカラ梅ニ
ハ暗部ノ古歌ヲ摘ミ白川夜船ノ俚語ヲ採テ誠ニ雜詠ノ
滑利ト稱セシ作者ハ柳川ノ十哲ニテ摺ハ木歳ニ各録

松茸狩

松丁牧

秋の對向北へあるはら 暖磯の山く物さるる

はらむし入神のまどやけい けいけい傘此柄とさるる

はらむし仲國の鳴やせし けいけい成り久しむらぐらむ

○評云此詩ハ全ク賦鮓トカラ後對ハ例ノ寓言ニ似スレト

暖磯ニハ仲國カヤ智ヲ喚出ス様ヲ示シ茸狩ニハ
盛んカ松風ヲ雨ニ乱舞ヲ含ム然レハ西行ノ歌ヲ
起句ト成レ樂天カ詩ヲ結句ト成セル和漢ノ操ハ更ニ
シテ總テハ採文ノ絶妙ト稱スレ作者ハ尾城武内ニシテ
近松ヲ氏トシ茂雄ヲ名トス其祖ハ義隆ハ山縣ニ住リ
北野天神ノ氏子ナリ今ハ掌法家ヲ縛置堂ニ稱号ナリ

戲花

作者ハ能登ノ七尾ニ住ス
岩城氏ノ傳人ニシテ同鮓ト
混珠ノ友ナリトフ

岩長羽

とほほらねらるるに花はり
花のさぬのちかきりき
さるしかり花踏はらるるに
いふはる花踏はらるるに

五

作者八州羽生ノ風人ニシテ
尾城下ニ放遊セリ

冊以之

蓮のさふまよと音によくと
はととものさ花流よとれそ
おとととふもや清くおと
おのさ花西とさくおと

鏡岩詠四季

林有琴

水とさとのぬく川後
心まよとさく花さよと
善い様おれりよつとよと
さよとさく花さよと

席のさよとおとさよと
花のさよとさよと

ととさよとさよと
さよとさよと

○評云此詩ハ全ク脚体ニシテ四季ニ面詠ノ分明ナル誠ニ風景四絶

ト云ハ但シ鏡ヲ鏡岩トハ各語ニ似テ脚詠ナリ其岩ハ美濃ニ

名高キ稲葉山北面ニ從目テ例長良川ハ東西ニ横フ樺ニ

蛭ノ花和ル席ト北岸トノ物淋キ田ニ魚双ノ各踏ト云レシ

然レハ此詩ノ評ニ如クニ鏡ノ風流ヨリ四季ヲ長良ト詞ヲ穀キキ

國ニ美良老ノ各ヲ並テ結句ニ諸語ヲ用ヌル等ヲ十成俳詩

ト稱スレシ作者ハ今ノ長良ニ任ス泊祖老ノ長田カニシ林傳徳人

詠蓮

作者八州中ノ城ヶ端ニ産
シテ市中ノ隠者ト稱セリ

其風子

とと仰のお解くまくれ
まよとさく花さよと

拙糸の擲れ霞ふあつとと 我ハ此處本とありあつとと

梅嫌

作者ハ園論ニ各録アリ
嫌ハ成テ和訓俗習トナ

岸倚度

新竹はよはくをいあむと 雪と花のなとあむと
梅の白とあふのころや 我りの花珊瑚あつと

悼水園公

蓮二房

越のきとら此のほねあね 世とあつとれあつと
月の入家ゆれと新あつと 瓦やおまは行のあつと
武と景あつと梅とあつと 文と頼政のあつと

らくあつとらとあつと 我しりてあつと

○評云此詩ハ風姿アリハ情アリテ和漢ニ通用ノ鑑トヤムシ
去ハ前對水ト行ト其地ハ竹林ニ河水ヲ廻シテ屋敷ヲハ
水園館ト云イ茶廬ヲハ此君菴ト云フ其館ノ名勝ナリ
トノ後對ハ文武ノ稱ニテ其名ハ流ヲ添ナカラ花ヲ咲ス
トハ本歌ニ敵シテ誠ニ翻轉ノ絶妙ト稱スレ況ヤ七八結語
ニ冥途ノ身ノ名ニ寄セテ同シ道ニト意ニ景ニ直クハ朋友
ノ信ヲ尽シテ遠クハ生死ノ道ヲ忘スト云レ此公ハ金城ノ
駒ノ子ナリ終焉ノ記ノ筆墨第ノ註ニ互見スレ

晚望

作者ハ島田氏ニシテ信ノ善克
寺住メリ獅子ノニ通ノ俳士

島未格

山をばんねくそ森ゆかり 孤村の月のゆかり

酒はたきとにりきあきぬ　もも葉の向は成りたけち

松讚

世松ハ賀ノ金城ニ在リテ作者ハ
豆田氏ナリトシ錦文評ニ互見シ

豆田曲

代く此平世くみはる　ときこちるねれつろ
吾とあのか旅此新　雨もやると物此葉
以しきつ了掃あつて　ちかよれむ髪あきと
むしらうけあものこ　りあつてもゆかうし

薊花

水陳人

あき葉此世もあつてく　角とくみ色よりけむ

眉をよむとあつてあき　深慮花をたけつあむ

業平、益贊

予空前ノ貞心
車帯ノ像ナリ

花仙

じうねとあつてあき　清くそりたかくあき
あき川はあつてあき　むしらうけあつてあき
あき川はあつてあき　美とらとあつてあき
あき川はあつてあき　あき川はあつてあき

侍石意

作者ハ羽ノ鶴園ニ住ス深慮氏ノ
優人ニノ吾仲在角ト書通ノ

深慮七

けり園はたきとあき　あき川はあつてあき

寄歸意
寄歸意
寄歸意
寄歸意
寄歸意

寄歸意

松丁牧

白と梓と此を多れはまに
まき孫の前此かたれし
と春のいのち此を流す
君と新の此をわたりし

挑灯吟

作者ノ兩名ハ檜歸詠ニ
此詩ハ京師ノ作ナリトフ

陳素六

世とぬらくと猿まのれ
月あつてくは度はくせ
又月の元わくおれは
力とけり後め浮名まゐる
世の中あつてまゐる海より
時々の園此へけりたれ

解の十川の流もたらし
いつと踏あげ此流とあつて

四季詠

作者ハ長野牛ニ越ノ新詠ニ
任ス長路掌洲カ家弟ナリ

長北柱

我鳥起とせしとくは
吾の火燈此むはあつて
時々のくは月もまゐり
月と春の流此をわたり

去者日疎

馬文人

ふの事此世をまるとこれ
麻柯の標しとくは
刺鱗の孫とくは
ひとりまゐりひとりゆる
蓬葉此をまるとくは
持手め御ときまゐり

今とある鴨川北 東とある河とありぬ

年加賀

此名ハ階凡カ標号ニテ讀法ノ
一夜菴ニ住ス常鑑ノ自跡ナリ 而老坊

じりし難者此喜に逢は 我らむ朝の梅も咲きし
早のゆりし松もたけりて ちきふつう新舟ちり

雅舟遊覧

作者童平ニ此名ハ文鑑
ニテハ第ハ翁ハ翁生家ノ
能解ナル故ニトク

梅長者

水月のはけしち伊勢の八景とりのあまむし夏の
新船との接おとさくくんの風爐とすれとくとそ
杉も鐘と音もさくんと大炊川の川幸にたぬ

かねき此舟の風はさくんと船の和歌きり
新舟の清波とるいよれ園のそくしあむん
とけきとさるしりし竹筒とくしけきおぼし
とあむれ今指す舟しは深とれんああ長
の文流す人しあやしとるんはくし舟月のあし
清し新舟のわらうとけきあむしあむし新舟の
春風しはくしあむしあむしあむしあむし
新舟さくしあむしあむしあむしあむし
あむしあむしあむしあむしあむしあむし
あむしあむしあむしあむしあむしあむし

遊女伝

伊東怒

ひら舞の肌さむく
錦もろくまきしなれ
之殿此るをよむ
手しきし草のふれ
おほくまきしなれ
板つらとあそびし
新故の秋しなれ
いづれもよむびなむ

恨別世詩尾城作ニ今各ラ出 佐麦士
セリト権辭記ニ其評アリ

神道の尾む此阿ふねから
風の名まじし神あつり
ねを志くね色よまき
梅もはくよ香あつり

呵ハ猫ヲ 首尾吟 岸倚彦

會婦く何とまき
あま汁しきやねく
氣まきまきあま
むし香しきあま
おぬいとお路しき
ねあまあけしき
ねむりくあまあま
會婦く何とまき

雨雨日日愛愛鯛鯛牛牛 豆豆風風曲曲

かくはあま
園とあまの角れ
荒くあまの竹の園
手水神くあま
雨の白れあま
あまのあまのあま
あまのあまのあま
あまのあまのあま

○歌類 雜題

孝老人賛

正親町 公通

はくくしんれいしんかあまの海哉
今ふくまふあひのいんてん

いし宗紙の指すこと

しんまのりしん後しん橋 宗鑑法師
いんあつしん

まふしん連しん花鳥はら後徳
いんれいしんあひのいんてん

題不知 此坊は蓮華の稱名ヲ
得之と越之各高き道心 秋々坊

焼くはくしん原のいんてん
あやあけらりららきん

白髮吟 五上序 芭蕉公羽

はくしん文舟のまやうしん武陸はら
の月にしんまあねやしんま
をの仲しんあうしん
のあまらく雨あつしんはれあふ
今あつしん

あつ言ふもあつ言ふに文のつれを感とれしむる母の心
かゝる浦のつれを感とれしむる母の心
さうさうのつれを感とれしむる母の心

一ふあつ言ふもあつ言ふに文のつれを感とれしむる母の心

さうさうのつれを感とれしむる母の心

○評云此吟の遺稿の遺話ニ題類ノ評論アリ其論略文
ニ故翁膏ヲ官ヲ辭シ玉に故郷ヲ隔レテ廿余年ノ或年
此懐四アリ志ハ天和初トシ其後伊賀ノ西林庵ニテ
例ノ文稿ヲ改レテ今思フニ白髮ノ鬚第ハ其日ノ感情ハ
演スレト發句ハ紫ハ波ニ作ラヌ此故ニ卷ノ字ヲ以テ歩行
様ヲ形容セシニ高木子ノ詞モ慥ナラヌ増テ坊子ノ入所ナレ

此等ヤ有様躰ト云テ凡ソウのつれを感とれしむる母の心
次キテ此語ノ歌モ然キヤト云レニ實モ前書ノ咏嘆ヨリ
墨墨冬ノ長湯ヲ評セハ玉屑ニ云ル此虫將由ノ非心ニ有テ吟ノ字
ヲ題センニト漢家ニ杜陵カシ子ニ假リテ白髮吟トハ題
セシナリ誠ニ題類ノ太切ナレ此等ノ註義ニ知レトフ但シ此論
古文後集ホニ廿黄堅中カ森字ノ沙汰ナリ然レハ今ノ歌類
ニ詞曲吟讚ノ類ハハ漢家ニ文選ニ隨ヒ本朝ニ文粹ニ效
ヒテ詩歌ハ本ヨリ一振ニ故ニ此等ノ題ヲ文々ニ後人例ノ考

扇歌 五序

東花坊

さうさうのつれを感とれしむる母の心
かゝる浦のつれを感とれしむる母の心
さうさうのつれを感とれしむる母の心

賢論ニ世等ノ文貫ト察スレ音韻ハ暫ク古法ヲ守ルノミ
總テ推量ノ沙汰止ハ後ハ例ノ郵察セヨ初ニ一節ノ註スル
所ハ其ハ一ハ扇ニ寄セテ逢字ノ縁語ヨリ班チカ恨タレ古語ヲ
假リ其ハ二故辨ノ扇ヲ見テ法顯ノ歎キレ故直ラ合ス其ハ三
ハ便面ノ詩歌ニ残リテ人ノ記念ノ果敢チキラ云ク其ハ四ハ深
奥ノ生別ヨリモ今ノ死別ノ悲シクシラフ其ハ五ハ市廣ノ詞ニ敵テ
世ノ定チキ有様ラ云ク其ハ六貫之ノ歌ヲ摘テ世ノ定キ別
ラ云クニ招急ノ二字ハ追慕ノ親切ニテ一節ノ骨節ト知
キナリ但シ世扇ハ越ハ伯免ニ傳テテ而栗存ノ水珍ナリ所々
ニ傳字ノ違エ有ヘシ

辞世詞

宇治通圓

一服一錢一駒中

最期一念云脚注

サシヒセヨリヒトシテクサカレ

カササレカレカレカササレ

佛奉養歌

苗草陀

牡丹とものまじりて
はくくと流るる
蘇とまじりて
るやとむし
残るる
手
け
け
け

るひかし世や仔細なり ちかき世のまをあらはれよ

○評云此歌ハ樂府ノ古辭ヨリ十句ニシテ互韻ヲ用テ去ハ隣對ノ法ナカラ論セハ大和ノ新制ト云ハシ去ハ二篇ノ稱スル所ハ其師尚白老人ノ生前ニ書ラ奉セシヨリ今ハ西行ノ櫻ニ勝リテ廟前ニ此花ヲ奉リケントク作者ノ姓名ハ勿論ニ出タリ

挽歌 並序

渡白狂

我にありき人の子世終るゝゆへにやされいし
長しうあいきをいしきまきしはまのちのゆめ
その月影のよのけしきとあはれはと我師の膝に
てあめはたすのうらみは情のよはあらしはらむ

新うてあしきつねにいしはれいものあはれい
て高北風はあつねの道はまよふ世のまよふ

せよたかくおこしきとあはれはと我師の膝に
きりくくをあらう。いしはらむのまよふ
やゝなしきつねにいしはれいものあはれい

○評云此歌モ樂府辭トカラ前ノ之句ハ七五ニ韻ヲ踏ニ後ノ
一句ハ七五ニ韻ヲ踏ムをモ和歌ノ韻法ニシテ總テ八句四韻ナ
本ヨリ樂府ノ常法ニ違フ外ト成セリ和歌ノ求韻
モ五文字ハ言搭ナリ然レハ此等ノ歌ヲ以テ和漢ノ通用ヲ稱ス

比紅尼曲 山岸昨春

むうへ麻比のり世終るゝゆへにやされいし
ちかき世のまをあらはれよ

あなめをばちるはらむもや 鹿とく海の懸ちるもや
 暖かいのちるはらむもや 服部のをばはらむもや
 心ゆくもはらむもや 夕日の海の中をばはらむもや
 いせとの雲もはらむもや とおのけらるるの影もはらむもや
 世と秋風の同じくはらむもや よるはらむもはらむもや
 舟の海をばはらむもや 月と星をばはらむもや
 花も初との花をばはらむもや 腰の批敷もはらむもや

七文張和讃

之首

柳屋園壽

石阿佛

阿彌の福をいしあはれむ川にささぐらふはらむ

のまをばらむもあつてもあつても
 けくふお娘とをふくまふも
 阿彌をばらむもあつてもあつても
 まま舟にささぐらふはらむも
 ままふの娘とをふくまふも
 阿彌をばらむもあつてもあつても
 神さむくまふもあつてもあつても
 あつてもあつてもあつても

○評云礼讃ハ序山ノ遠法師ニ始リテ太夫奉ノ善観房ノ節
 ヲ附玉ニ我朝ノ事明ト成セリ其意ハ仏ヲ讃歎ノ和歌
 ニ咏嘆ノ類ナリトフ然レハ此讃ノ趣ハ人間ノ色采白ヲ

星ニ寄セテ人ニ無常ヲホスルハ應現婦女ノ仏説ニ善薩
ニ天部ノ祐号ト知レ誠ニ佛説ノ疑々ニ云ル談為、説諫ニ世古又
三ノ遊宴ノ中ノ哀手ヲ知レ下ナリ 而阿ノ各ハ刺野支文ニ山、
又リ

讀法華經

秋之坊

その時よとてちほりたれあ
こげとあふらひたれちほり

故人庵茶歌

蓮二房

唐のやまに花とて中は一斗百と雨のうらみ
まよひせんせうのうらみと南行の重作是故人

来^ルまよひせんせうのうらみと南行の重作是故人
つとつれとむしれとけなみのあふと茶肴のいれ
いし海をきかたも序らの雨に淋いとまよひてたの
離^カのこらとてとまよひとまよひいとまよひと
まよひとまよひのやれ空のふらと唐とて中とて北行と
花のくまよひと程子の鴨野を車とりてと玉川の
新島の煖が茶と入れとちかく北行のなほと
まよひとあら茶とるめきつぬれとらまよひと
い遊のやんせとれと痛まよひのうらと茶肴のい
茶枝とまよひとまよひとまよひと茶肴のい

一くかゝる泡とをくくしきうたせ。白たのひらりよ
 香とれわれ二碗ら旅とららう。一七碗よかの
 清月とらしとほ風ろこり来りあらんまきへるよ
 うさくまらしくや川の。穴さきくねあきちりてき根
 の風しうたかふ。秋とおぼから此麻の香。あ
 吹あくる萩の風しかのきあふのけし吹はく。けし
 よ代のきさき。あねをや。遠くのまら川。まらけ
 さき。くくをほくさき。か。と

○註曰●飲中八仙詩。李白。一斗詩。而空。何。云。○行。あ。き。ま。ふ。れ
 い。あ。き。の。ら。れ。あ。き。く。あ。き。の。ま。ら。く。一。斗。の。ま。ら。け。り。あ。き。

●蘭省彦山ノ對八前ニ出タリ●李白襄陽歌。鸚鵡杓
 鸚鵡盃一日須傾。之而盈。●盧仝茶歌。摘鮮焙芳
 旋封畏。云。玉川トハ。序。全。標。号。ナリ。△十論。世。蕉。公。羽ノ
 遺訓。あら茶。石。り。あ。き。な。き。り。あ。き。の。ま。ら。く。と。あ
 る。云。△。は。れ。く。竹。ト。ね。希。あ。き。あ。き。の。ま。ら。く。の。ま
 ら。く。あ。き。の。ま。ら。く。の。ま。ら。く。の。ま。ら。く。の。ま。ら。く。の。ま
 ね。事トハ。茶。人。歌。人ト。詞。對。テ。定。規。ノ。古。風。ヲ。笑。ハ。ナ。リ。世。等
 ラ。俳。諧。ノ。意。地。ト。知。レ。シ。ム。く。か。く。の。松。詞。ナリ。歌。三。泡。ノ。訓。ヲ
 假。テ。多。ハ。哀。ト。誦。メ。リ。万。葉。ニ。歌。方。ト。書。ク。テ。ト。轉。源。ナ。ト。書。ヘ
 キ。ニ。ヤ。擲。ス。レ。ニ。世。二。句。ハ。二。句。茶。ノ。泡。ヲ。立。テ。ト。云。ハ。例。俗。言。モ。題。
 難。キ。ヲ。レ。ク。か。く。の。松。ニ。雅。語。ト。成。セ。ル。世。等。ヲ。擲。骨。ノ。絶。妙。ト
 稱。ス。レ。●茶歌。白花浮老。疑。碗。面。ト。其。泡。ノ。自。キ。ヲ。取

客入玉川茗湯八種ト見タリニ碗以下七碗ヲハ其歌ノ
 取意ナリ●同歌唯覺西脰羽目々清風生云○貫之歌
 様らるふあり作ををのりて元一とつれあをそかゆ
 嵐ノ通フハ式子内親王ノ歌ノ裁入ナリ○新古今のあてはせ
 たり山ノ入ノ雁のあは吹かくる秋の風○孫子載子代
 如(ま)くあひのまらまらと桂つれ行や君とあはれん
 ●茶歌結文蓬萊山在何處玉川子乘西清風一歌
 歸去云結語ハ以ノ一字ヨリ一篇ノ新續ヲ見キナリ
 ○評云此等と如より後まゝ序全茶歌と題とすといふ
 起語新續の句松子しかるを也經音の所よりこれ
 七新製の一格とありはれし行は故人の詩に事取
 らし事益とし作をよ西風のけはあれハ朝の後勤

一と色ルケ今全備の稱よりあを茶とほつた一節の
 之地とありし行と違ふに子代の祝言とありとい
 て句格をあましく和音の振中をとりなると和音の
 強ゆるりや也經音此辭をまらるもれはあありしを
 源家め松姓より越の福赤く婿官も去駁ハ能清
 のあまらるりより一も鞍のめをりや青了園にあま
 て六松云と方印のなありといふ

練漣歌

野盤子

野棲山宿野盤子秋病何為拭淚頻
 桃李難親唯一日雁無見過已之春

可憐重^{シテ}茶^ヲ長^ク為^リ客^ト自愧傳^テ書^ヲ遠^ク附^ラ人^ニ
 我^ノ前^ニ 夜深^ニ 扱^ク木^ヲ身^ヲ隨^フ 日^ノ莫^ク忘^ル家^ヲ
 子^ハ罵^ル 嗟^フ夫^レ 灯^ノ火^ノ幾^ク年^ハ傍^ニ母^ニ 香^ノ烟^ヲ
 影^ノ月^ノ亡^ク親^ヲ 君^ヲ見^ユ 眼^ノ邊^ニ烟^ノ霞^ニ誰^カ可^ク
 憐^ク心^ヲ誇^リ以^テ月^ニ未^タ全^ク貪^ム起^キ来^テ好^シ有^ラ皮^ト與^フ
 膏^ヲ痛^ク可^ク以^テ雲^ヲ放^ツ此^ノ身^ヲ

○評云此歌ハ灯^ノ花^ノ詩^ニ最^ニ取^リ在^リテ天^ノ和^ノ比^ヲ作^リト誠^ニ一篇^ノ
 躰^ヲ見^ルハ趣^ハ漢^ノ家^ノ詔^ノ脉^ナカ^ラ意^ハ大^ニ和^ノ風^ノ後^ト云^フ然^レハ
 此^ノ類^ノ格^ヲモ傳^テ和^漢ニ通用^ノ鑑^ト成^リハ此^ノ文集^ノ採^リラレ
 例^ニ詩^ニ最^ニ取^リ中^ニラ透^ス来^テ此^ノ一^ノ篇^ヲ出^セル^ナリ字^ハ趣^ノ意^ノ

差別^ヲ考^ヘテ黃^白ノ紛^ヲ恐^キナ^リ練^漉ハ但^シ多^ク情^ノ様^ニテ
 旅^亭ノ病^懷ヲ字^セル^ニ野^盤ハ先^師ノ名^ナカラ竹^宿水^棲ノ
 意^{ヨリ}起^ク句^ニ我^ノ名^ヲ喚^出セ^リト右^ハ本^集ノ題^註ヲ按^スレ
 此^ノ歌^ハ三^ノ融^カ豆^山中^ノ歌^ノ如^ク七^六ノ句^法ヲ用^テニ取^リ發^語
 ハ例^ノ樂^府ニ效^ヘリ然^レニ古^文ノ歌^曲ヲ見^ルハ五^七ノ詔^路ハ和^漢
 ノ恒^例ニテ或^ハ九^七ノ長^短アリ或^ハ五^七ノ長^短アレト假^名ニ詔
 路^ノ拍^子ニ合^ハス多^ク音^訓ノ差^別ニレテ和^漢ノ字^向ノ遠^近内
 ナハ先^師ノ詩^序ニ云^フル^ニ如^ク趣^ハ漢^ノ詔^ノ字^面ヲ飾^ルレ其^ノ意^ハ
 和^詩ノ風^俗ヲ失^ハラ^ズ然^レ詔^路ト音^韻ノ沙^汰ハ辟^言ハ苦^相
 江^中ノ智^{アル}モ我^ノ朝^ノ土^地ニ素^達スル^ニ字^者ハ漢^ノ家^ノ假^燒ノ無
 筆^モ方^リテ詔^路ノ長^短ト音^韻ノ叶^不叶^ハ皆^々推^量ノ苦
 ナハ返^スル^モ我^ノ内^ノ字^者ハ假^名ト直^名トノ通^用ヲ知^ルナ^リ

○辨類

聖人^ニ才^キ及^キ辨

伏庵和尚

日向^{アケル}也却^{ユロホヒ}來^テて天^ヲ見^ル神^ハ波^ハ
夏^モ及^キ冬^ニ亦^シ矣^ナ物^ヲ去^リ還^ル柳^ノ事^ヲ録^ス
百^ノ了^ル在^リ彼^ノ何^レ奈^ニ何^レ濃^ク
色^ハ能^ク養^フ

戲^ニ之^ヲ與^フ好^ム子^ノ人^ニ

○評云此一章公聖人^ニ無^ク憂^ハト云^ハ凡^ソ古^ノ語^ノ四字^ヲ題^シテ
此章^ノ辭^ニ書^キ置^キ玉^ルラ^シ多^ク辭^ノ一字^ヲ添^テテ文^ノ採^ル師^トハ

成^リテ^リ去^ルハ此^ノ文^ノ拍^子ヲ評^セハ或^ハ万^ノ葉^ノ旋^頭歌^ニ非^ズ
ス或^ハ庭^訓ノ直^名文^ニ非^ズハ此^ノ等^ヲ大^和ノ辭^ト名^附テ例^ニ
文^ノ採^ルノ新^制トヤ云^フ誠^ニ和^尚ハ四^ノ勝^ヲ其^ノ文^ニテ其^ノ實^ニ
ナル多^ク好^ム事^ノ向^流ヲ見^ルハ其^ノ四^ノ佛^ノ語^ヲ動^カル^ル本^ノ意^ナナシ

刀虫^ノ辨^ニ并^テ序^ナ

苗^ノ宰^ノ陀

海^ノ館^ノの城^{あり}もやも國^を師^の座^のつら。富士^の
まありのり^の米^をなれ^ぬもい^ふも^のつら^し海^ノの^なり^のや
宵^中の^茶向^とな^りもい^ふも^のつら^しと^越え^るも^のつら^しも^のつら^し
の^と雪^舟舟^雪村^のの^{つら}も^のつら^しも^のつら^しも^のつら^しも^のつら^し

ことあるおひらけはつとまじりか
 垢といわぬに比ゆの意とくし塵はのり
 ぬくもあまよきおはれはれはれを
 此はあくとまじりし月てる雲は茶
 けりし脚布のまじりとちりちり
 ちりし村人のまじりちりちり
 ちりし桶と我食の天あれし特めは
 ひらりせされたの雲はをぬくか
 不意の命とまじりし有る持妻は
 風の熱湯とまじりし熱いむしむし

袴はいつて宮女せしり音はつと
 の袖もく。衣のられはれはれはれ
 婦女しきこなされ又鳥はれはれ
 のしはれはれはれはれはれはれはれ
 あつて説とるの

其辭

秋のおまじりと何とてまじり
 信ちこまじりちりちり
 故とてまじりちりちり

えらふは代々何んは。と。この酒よりまねは

○註曰△標伽經乾闥婆城註△屋構之類也△月令註△屋
大輪也○西行等風△あいく富士のまゝありのやうにして
り来しとてぬれりし中△侍語拾遺△童信△思△茶の
とせうとてあうとて富士のやうとらうとて△
農氏の子は天下をゆるる△此の風言のそ△山姥説△
の雲は塵はのりて山姥△あり△いづくいづく
△書經△食△天△山谷演雅詩
風甫湯沸猶血食△常陸尾△松△常△在り○案
赤山ノ歌ハ古今集ニ在リ△挿△二對△八△食△美△女△
衣類ニ寄セテ△虫△哀△糸△業△石△中町説△
の婦△す△く△ま△く△あ△れ△あり ○百人△あ△ら△る

かゝらむとてはるありしとておぼえさるる故の詞也。

○詠ふは辞とて松物比興ありて四の字もあを刃ちりて
あゝ或夜のこまに越えとてわらへし結文とて而この詞と
かゝらむとて又の比見とてわらへし結文とてハまゝお初とて
今重なりて思はれぬありて七八の字代の實をむしむとて
詞もよとてあゝとてわらへしとて此の詞のまじりてあゝ
作歌とて湖南の大津とてはるも蒲村氏の速とてして
池沼の遊戯ありて百を離とて不をありとて

感畫落辭

東荅坊

我今身痛畫而見樂天之畫落辭了則髮

衰辭頭葉衰辭樹與哉誠運和溪之情而
復與感慨乘耶今將不佳吉之和歌共將競
文章之哀與也熟思人之遊世則同好花
鳥之色兮耳樂絲竹之聲兮揀其香兮調
其味兮此四者實謂意之馬車矣乍有
此四者善用了則為樂人兮惡用了則為
苦人兮物皆謂一得一失者矣于然謂人
向之遠物者貴麼賤麼武夫麼商人麼有
日々夜々之用而與壯兮口齡兮令樂人
了共與令苦人事爾連受過世人有眠花

了辭月兮盛時尔者不樂其盡衰日尔者
苦此盡不知生則何知死與者孔子麼所
宣給蓮之事也乘奈何所哉人之思違而
耳用者為不病月之用心共盡者不思不
衰時之養生矣爾人之嚼老而老曾木林之
夕嵐為敬一葉之秋則葛之每葉動初鼻
矣菰之上葉麼以洩而物言則笑了童部
兮物喰則慙通給司兮何歎老身之爾者
有見苦耳耳副同副不似于盡乘矣好夫
所謂人有髮容了共仔細海蟹之不築之深

麼有令意墨深之尼樣共爲畫之技乎者
不真類而曉之漆寢麼有物學乎社人
之爲意也飾耳了耶瑗臬止耶畫者誘引
謂伊達之花矣止尤者在共觀物之榮落
了則名麼被環摺針之砂而其所有鏡之
山則沐梅花之油居嗽揚枝之薰而昨日
者貴於夜光之璧兮日月者賤如夕與之
核兮何之榮落如斯也耶朝顏者花之假
世共不似生而見憂同人季昔手佳了雉
子之香而不異鬼之嚼煎餅了今也馴入

豆腐之味而爲似蝶之膏牡丹兮斯近離
老之声色也則畫已特爲明覺之樂厚哉
我若魚同則隨魚而令管絃之中遊心矣
我若魚耳則隨魚而可畫畫之向置身矣
實夫在世而無畫則且兮有而味之膳共
夕兮有八珍之菓共歡令悅老之同而所
宜給心造罪非施饑鬼之誠季耶我今悔
一畫之過而誨而世之人了則可畏飲食兮
不意酒色兮身者所榮若松之綠共心者
黃及老木之葉迄厭入身秋之風而從鷹

之恪ツク一羽ハ麼モ從ヨリ蘭ノ之ツチ培カフニ葉ニ麼モ彌ト疾ト諱ヒテ一
 畫ノ之コ價カ而レ不レ換ハ千兩ノ之コ黃カ金子了ニ哉ト在ト連テ換ニ
 月花ノ之コ凡カ色ニ而レ貪ハ魚ノ身ノ之コ凡カ味ヲ則レ從ニ詩歌
 連歌ノ可ク賤ク見レ了ニ共ニ聖ト帝ノ之コ詞ヲ今モ麼モ人ノ者ハ以テ
 食ヲ為ス天ト與テ手ヲ兼テ好シ法師モ麼モ從ニ玉ノ卮ノ者ハ以テ飯
 思ハ意味ト敷ト則レ哉ト書キ置ケン流カ石ノ之コ竹ノ帛ノ泉ノ定ト於
 然レ人ノ之コ忘ル畫ト也ト則レ可ク厭ハ者ハ謂ヒテ忘ル來ト而レ歌ム耶
 誠ニ為ス忘ル天ト人ト也ト正ト

○評云此題ハ白氏文集ニ出テ樂天カ老妻歎クハ灯花詩ニ取
 ニ感ノ一字ヲ加テ大和真名ノ辭ト成セリ去リヤ佛家ノ

經說ニ眼耳鼻舌身意ヲ六根ト云ク色声香味觸法ヲ
 六欲ト云テ園通ヲ説テ其利益ヲ勸メ執着ヲ誡メテ其
 損害ヲ懲ラヌ六根ハ但レ善惡ノ二相ト云シ然レモ此畫ノ用
 々々四支九竅ノ働ニ勝リテ日夜ニ人ヲ利スレバ抑モ物ヲ害
 スル莫クシ況ヤ老後ノ声色ヲ離レ六欲ノ中ニ何ヲ樂シ去ル
 需者モ此經ニモ此畫ノ佳ヲ稱セテハ強テ耳目ニ難附テ畫
 ニ千金價ヲ争ハル莫ク文章ノ意地ト知り俳諧ノ筆格
 ト知キナリ誠ニ一篇ノ凡流ヲ稱セバ老僧日ノ段ニ和考ノ婉曲ヲ
 寫シ摺針ノ段ニ俳諧ノ談笑ヲ尽シテ中此ハ一篇ノ大綱ナレ
 管後ト書ク處ト二月月ヲ讓ハテ畫ニ老後ノ日用ヲ奉ルニ
 前ニ孔子ノ死生論ヲ合セ後ニ秋高寺ノ饑鬼道ヲ引キテ
 儒佛ノ證文ニ文章ヲ固見タル増テ塵尾ト蘭葉ハ和訓ニ

出探卷之三
第廿五
畫字ノ御書十六本ヨリ六書ノ削ニ效ヒテ和漢ニ假借ノ極妙ト称
スレ然ルニ一篇ノ結段ハ例ニ連條ノ敵詞ヨリ各ニ遇フ書經ノ
帝範ヲ引テ天ノ字ニ万人ヲ誠スル誠ニ理論ノ虚妄ト云イ誠
ニ文法ノ死活ト云イ和漢ニ假名真名ノ自在ヲ得テ其等ヲ
文探ノ本懐トヤ云ハシ字ノハ文字ノ置所ヨリ句讀ノ長
短ニ眼ヲ留キナリ

文探卷之三終

